書　評・紹　介

キャサリン・S・ニューマン著　萩原久美子・桑島薫訳

『親元暮らしという戦略―アコーディオン・ファミリーの時代―』

岩波書店，2013年11月，296+38p.

本書は，Kartherine S. Newman によって2012年に著された“THE ACCORDION FAMILY : Boomerang Kids, Anxious Parents, and the Private Toll of Global Competition”（Beacon Press, 2012）の邦訳である．「アコーディオン・ファミリー」とは，子供達が成人して巣立っていったり，一度巣立った子供達が必要に迫られて親元に戻ったり，また出て行ったりという家族変動が繰り返され，それを受けて親世帯が拡大したり縮小したりする状況を，アコーディオンが蛇腹を伸縮させる様に例えた著者の造語である．原題にブーメランキッズとあるように，本書では特に，一度縮小した親世帯に子が合流して再び拡大する現象が世界各地で顕著になっていることに着目している．著者は貧困問題，ワーキングプア問題を専門とする社会学者で，民族誌学的なアプローチによる質的調査を得意としている．本書の土台となっているのは，2006年から2008年にかけて，日本と欧米の６カ国において，親世代と子世代の双方総勢300名を対象に行われたインタビュー調査による国際比較研究である．

著者は，先進諸国でアコーディオン・ファミリーを顕著にした主要因はグローバリゼーションによる若者の雇用環境の悪化であるとする．そこに教育費と住居費というさらなる圧力が加わり，その衝撃を吸収するために家族のセーフティネットとしての機能が働いたのがアコーディオン・ファミリーのメカニズムだという（第２章）．そして，こうした社会の圧力が増大したとき，弱い福祉国家（日本，イタリア，スペイン）ではアコーディオン・ファミリーが増大したが，強い福祉国家（スウェーデン，デンマーク）ではそうはならなかったと述べる．その分岐点を，高齢化と人口減少という先進国に共通の現象を背景に，前者は若者のセーフティネットの役割を親世帯に委ねて財政を緊縮させ，後者は若者が自立するためのコストを納税者全体で負担する道を選んだことであるとする．また，アメリカは弱い福祉国家ではあるが，豊富な移民人口に支えられて現在は両極の中間にあるとし，一見パラダイスのような北欧の国々のデメリットも挙げながら（第６章），アメリカがどちらの道を選ぶことができるのかという議論を積み重ねていく．また，著者は，日本に残された選択肢として，高齢者を労働力としつつ生産性を高めるか，移民によって労働力を補うかという二つを挙げる．それと同時に，日本が将来の労働力の質を高める機会を失ったこと，アコーディオン・ファミリーが顕著な国で移民への反発があることを危惧している（第７章）．このほか，各国における若者の自立意識の変化（第１章）や，当事者である親と子それぞれの意識（第３章），アコーディオン・ファミリーに対する文化的反応（第４章）についての国際比較も豊富で，自立や親子同居に対する規範の変化など示唆に富む．

著者もアコーディオン・ファミリーは一時的な解決策だと述べているが，日本でパラサイトシングルが社会の関心を集めてから20年，本書の調査が行われてから10年が経った現在，状況はすでに一つ先へ進んでいるだろう．終章にある「フリーターが四十代になり，高齢の親の年金に頼るようになってきている．ゾッとするようなシナリオ」は現実のものとなっている．失われた20年と少子高齢化の併走を経て，家族のセーフティネットとしての機能は低下し，合流できる家族自体をもたない者も多い．本書を通じて，社会的連帯の再構築においては，長期的視野と多様な選択肢が重要であることを再認識させられる．そのためには長らく社会に定着してきた家族に対する規範にとらわれないことが鍵となろう．

（小山泰代）